



293号
2024/5

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



鳳凰古城で Let's dance! : ゆったり流れる沱江(だこう)に置かれた跳石の上ではしゃぐ仲良し四人組。ここは「中国一美しい街」といわれ、ミャオ族・トゥチャ族など数多くの少数民族が暮らしている地域。沱江に掛かるミャオ族伝統の建築様式「吊脚楼(ちょうきやくろう)」をはじめ、清代に敷かれた石畳の道、楼閣のある橋など三百年以上を経て今に受け継がれる建造物や文化が魅力的です。(2017年9月 湖南省鳳凰県にて 高橋節子)

'わんりい' 2024年5月号の目次は22ページにあります

今月の言葉は中国語として、ご存知の方も多いと思います。日本語でこれに代わる四字成語は見当たりませんね。

・>・>・>・>・>・>

昔、孫山という科挙受験生がおりました。ある年、彼は試験を受けるため、隣家の息子と一緒に上京し、受験後、合格者名簿の最後で自分の名前を見つけましたが、隣家の息子の名前はありませんでした。

彼が郷里へ帰ると、隣人が訪ねて来て：「孫山や、うちの息子は合格したでしょうか？」と訊ねました。孫山は、直接不合格だったと答えるのは気の毒だと感じ、紙と硯を持ち出して、「郷試首席合格者に最も遠いのが私（孫山）、あなたのご子息は孫山よりさらに遠かった」と詩文を書いて渡しました。

彼が言いたかったのは：「合格者名簿で最後の合格者が私（孫山）でした。あなたの息子は、私の名前の後ろにありました、つまり試験には合格できませんでした」ということでした。

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味：孫山＝試験合格者名簿の最後の人の名前。名前が孫山の後に有るということは、試験や選抜で選ばれなかった人のこと。

使い方：大学入試の成績表が発表されたが、普段努力をしなかったので、小明は今度もまた名落孫山（不合格）だった。

・>・>・>・>・>・>

入学試験など、選抜に漏れたことを婉曲に言う言葉で、中国では良く使われるそうです。出典は宋代の范公偁はんこうしょうという人が書いた「過庭録」という書物です。「過庭」とは、「論語・季子篇きし」で、「孔子の子・鯉が庭を横切った時、庭に面し座ってい

た孔子に呼び止められ、色々教えを受けた」という話から、家庭内の年長者から色々教えを受けることを「過庭」と呼びました。公偁が、北宋の大政治家・文人范仲淹ちゅうえんの子、純仁じゅんじんの玄孫に当たるため、父親から范仲淹や純仁の話を書いて書き留めて「過庭録」としたもののようです。

試験結果を見るのは、ドキドキしますね。子供の試験結果ともなれば、一刻も早く知りたいのが人情ですが、今のように通信手段が発達していない昔は、一緒に行った人が帰ったと聞けば、急いで訊きに來るのでしょうか。

訊かれた方は、良い結果なら喜んで伝えますが、落第だとちょっと辛い思いをします。そこでこんな文言

を伝えたのです。中国語では、「解元尽処是孫山、賢郎更在孫山外（意味は概略、お話の中の通り）」と言います。

このお話の「試験」はご存知「科挙」の中の、「郷試」あるいは「解試」と言われる地方試験で、合格者はこの後、都へ上って、皇帝直々の試験を受けるのですが、この「郷試」に受かったら、もう将来を嘱望される人物として様々な厚遇を受けます。一方、不合格者は今と同じか、或いはもっと精神的にきつい生活を強いられます。まさに天と地の違いが生じます。

古代中国社会にとって、科挙に合格することは本人にとっては勿論、一族にとっても、とても名誉なことで、合格の可能性のある子供がいたら、一族を挙げて応援しました。確かに、千年以上前の人の経歴に何年の何の試験に合格したと記録が残るのですから、気合が入るのは当然でしょう。

それにしても、昔からの試験の記録が残るとは、さすが、文字の国「中国」ですね。



挿絵：満柏画伯

杜牧『江南の春』

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

今回は杜牧(803~853)の名作『江南の春』を取りあげてみましょう。この作品は孟浩然の『春眠』李白の『静夜思』杜甫の『春望』などと共に日本では昔から人口に膾炙して、教材としてもお馴染みです。しかも訓読文そのものが平明で、日本語表現としての完成度が高く、敢えて和訳する必要もないように思えます。仮に和訳したところで蛇足の感をまぬかれませんか。ただこのシリーズの趣旨を維持するために敢えて余白を頂き、和訳を試みてみました。

杜牧の生まれは京兆万年(陝西省西安市)。祖父は『通典』の作者として有名な歴史家の杜佑。詩聖杜甫とも共通の先祖を持つ。兵法にも興味を示し、『孫子』に注釈を施すなど、気骨のある一面もありました。正義感が強く、それが災いしてか、あまり世渡り上手ではなかったようです。

詩風は当時の流行であった華美を嫌い、平明に徹していますが、時には遊里の巷に入り浸って浮名を流すロマンチストでもあったようです。

jiāng nán chūn dù mù
江南春 杜牧

qiān lǐ yīng tí lǜ yǐng hóng
千里鶯啼綠映紅
shuǐ cūn shān guō jiǔ qí fēng
水村山郭酒旗風
nán cháo sì bǎi bā shí sì
南朝四百八十寺
duō shǎo lóu tái yān yǔ zhōng
多少樓台煙雨中

*緑映紅=山の緑に赤い花が調和するさま。*水村山郭=山や運河に囲まれた江南地方の農村風景。*酒旗=酒屋の幟旗。*南朝=今の南京にあった四つの王朝。宋、齊、梁、陳。これに呉、東晋を加えて〈六朝〉ともいう。*四百八十寺=数多くの寺。「四百八十」は数の多いことを示す。なお、訓読では〈しひやくはっしんじ〉と読む習わしがある。*多少=ここでは数の多いことを示す。*樓台=寺院の樓閣。*煙雨=霧状の細かい雨。霧雨。

〔訓読〕

江南の春 杜牧

千里鶯啼いて緑紅くれないに映ず水村山郭酒旗すいそんさんかくしゅきの風

nán cháo sì bǎi bā shí sì
南朝四百八十寺
duō shǎo lóu tái yān yǔ zhōng
多少の樓台煙雨の中

鶯の鳴き声が千里の彼方まで響き渡り、山の緑が赤い花々に映え、江南の地の水辺山辺の集落には酒屋の幟のぼりが風に靡いている。南朝時代に栄えた仏教寺院の方を見やると、無数の樓台が煙雨の中に包まれている。

さてこの詩の前半の2句で詠われているのは建康(南京)郊外の明るい農村風景です。ところが後半の2句になると一転して雨模様の遠景に代わっていきます。これはどういうことなのでしょうか。

これには昔から様々な解釈があります。例えば前半と後半では立つ位置、もしくは時間が異なるというものです。あるいは作者が一日中同じところに立ち尽くして感慨に耽っているうちに天気も変化していったということもあるかも知れません。また、ここに描かれているのは実際に見た景色ではなく作者の心象風景であるという解釈もあります。

だとすれば、この時作者の胸に去来するものは何であったか。そのことも視野に入れておく必要があるかも知れません。

作者杜牧は仏教徒ではなく、詩風においても、南朝詩の華美な表現には馴染まなかったようですが、唐代文化の礎を築いた南朝文化そのものには強い関心を抱いていました。古都南京に取材した作品も数多く残しています。

仏教寺院にも度々足を運んでいます。北方出身の作者にとって過去の栄光を伝える古都南京の風物はよほど刺激的なものだったと思われます。末尾の一句は、歴史の彼方に消えゆく南朝への哀惜の念さえ感じさせます。

〔和訳〕

鶯の声こだまして

山花さんかに映える酒旗しゅきの波

栄華を語る南朝の

寺門じもん寺塔じとうは霧なの中

李清照の三詞

報告:花岡風子

2024年3月の漢詩の会は、長年のメンバーにとってはお久しぶりに李清照の詞を鑑賞しました。

李清照といえば、中国で人気ナンバーワンの女流詩人です。個性豊かな〈詞〉の作品を数多く残していますが、今回は、植田先生の特別セレクトで、三首も堪能できました。天真爛漫な少女だったであろうことがうかがえるユニークな《点绛唇 蹴罢秋千》と《如梦令 常记溪亭日暮》、そして、志士のような一面を見せた漢詩《夏日绝句》です。

本題に入る前に、講座ではいつも作者の人生ストーリーから始まりますが、李清照の人生は、正に波瀾万丈。生きた時代も北宋が滅びるタイミングで非常に苦勞します。現在の山東省に生まれ、父親は文学者として有名な李格非。母は宰相王珪の娘でした。学者の家に生まれたお嬢様で、18歳の時に金石学者の趙明誠と結婚します。親に決められた結婚であったのに、二人は相思相愛で、夫の研究を助けて『金石録』を完成します。しかし、晩年は戦乱に巻き込まれ、地方を転々とするうちに、膨大な蔵書や拓本などの財産を失い、政治家でもあった夫も、赴任先で病死してしまいます。

「人生最後に再婚しますが、夫から虐待を受けて、100日ももたなかったようです。それでも、65歳まで生きているので、逞しい女性ですね。」と植田先生。

無類の酒好きでもあり、お酒にまつわる作品も沢山書いています。そういえば、以前鑑賞した「如梦令」も二日酔いの詩でしたね。清照の作風は人生の時期によって、大きく違ってきます。人生前半の作品は、自然の謳歌や少女時代の恥じらい、夫と新婚の幸せ、別離の不安や寂しさなどをテーマにしています。

さて、《点绛唇・蹴罢秋千》は、少女時代の李清照の日常の一コマを描いたもので、庭のブランコで遊んだ後、突然の来客に恥じらう様子が描かれています。感情豊かでプライドも高い少女の様子が伺えます。言葉も平易で、4コマ漫画のように場面が生き生きと伝わってきます。詳しく見てみましょう。

diǎn jiàng chún cù bà qiū qiān
《点绛唇 蹴罢秋千》

cù bà qiū qiān
蹴 罢 秋 千，
qǐ lái yōng zhěng xiān xiān shǒu
起 来 慵 整 纤 纤 手。
lù nóng huā shòu
露 浓 花 瘦，
báo hàn qīng yī tòu
薄 汗 轻 衣 透。
jiàn kè rù lái
见 客 入 来，
wà chǎn jīn chāi liú
袜 划 金 钗 溜。
hé xiū zǒu
和 羞 走，
yǐ mén huí shǒu
倚 门 回 首，
què bǎ qīng méi xiū
却 把 青 梅 嗅。

け お
秋千を蹴り罷え

ものう せんせん
立ち来りて整うるに慵し纖纖たる手

露は濃く花は瘦せ

けい
薄き汗軽衣に透る

客人の入り来るを見て

べつせん きんさ すべ まじ
襪割にて金釵を溜らせ羞らいを和えて走る

よ
門に倚りて回首して

と
却って青梅を把りて嗅ぐ

お庭に大きなブランコのある深窓のお嬢様が
ブランコをこぎ疲れ
気だるそうに衣服を整えるその手は細くて綺麗
季節は晩春の頃か
露は濃く、花は落ちて
薄い着物がしっとり汗ばんでいる

ここで場面が急展開
お客さんが訪ねてきたのです。
靴がとんでいって靴下が丸出しになっているし
簪もどこかになくしてしまった

お客さんに見られては恥ずかしいと立ち去りつ
つも、門に寄り掛かって、誰が来たのか見ている。
照れ隠しに、青梅をひとつもいで香りを嗅いでい
るふりをして・・・。

「最後は、私、あんたなんかどうでもいいのよ、
っていうふりをしていますね。少女の照れ隠しで
すね。ひよっとしたらサザエさんにこういう場面
があったかもしれないですね。長谷川町子さんに
はできるかもしれないが、これは男にはできない
ですね」と植田先生。

次の《如梦令・常记溪亭日暮》という作品もまた
昔を思い出した詩ですが、なんと酔っぱらってい
ます。いったいこの時は何才だったのでしょね。
最後の一句が味わい深いです。詳しく見てみま
しょう。

rú mèng lìng cháng jì xī tíng rì mù
《如梦令 常记溪亭日暮》

cháng jì xī tíng rì mù
常记溪亭日暮，
chén zuì bù zhī guī lù
沉醉不知归路。
xìng jìn wǎn huí zhōu
兴尽晚回舟，
wù rù ǒu huā shēn chù
误入藕花深处。

zhēng dù zhēng dù
争渡，争渡，
jīng qǐ yì tān ōu lù
惊起一滩鸥鹭。

おぼ けいてい にちぼ
常に记ゆ溪亭の日暮

ちんすい きろ
沈酔して帰路を知らず

きよう
興尽きて晩に船を回らすに

おぼ おうか
誤って、藕花の深き処に入る

いか いか
争で渡らん 争で渡らん

いったん おうろ
驚き起つ一灘の鷗鷺

いつも思い出す溪亭の日暮時のこと

酔っ払って、帰り道が分からなくなって

興味もなくなったので、船を返そうとするのに
あやまって蓮池の深いところに入り込んでしま
った

どうやって渡ろうか どうやって渡ろうか

蓮池からカモメやサギなんかの水鳥が驚いて飛
び立った。

「おいおい、当時は灯りも携帯もないのに、女の
子がお酒に酔っ払って帰り道がわからなくなると
はね」と植田先生。今だとショート動画に上がっ
ていそうなシーンですね。寝ているところ突然に
小舟に突っ込まれ、驚いて飛び立った水鳥たちの
姿や羽音や水音まで聞こえてきそうな感じがしま
す。

さて、仲睦まじいとされてきた夫との関係です
が、最後は悲しい結末となりました。1127年、清
照が44歳のとき、中国では「靖康の乱」が起き、
金の軍隊が北宋の首都を攻め落としました。ちょ
うどその年に、夫、趙明誠の母親が南京で亡くな
り、夫妻は、このため南京に行くことになりまし
たが、その時、北宋の首都だった開封はすでに陥
落し、彼らの家があった、山東省を含む北方地区

はとても危険な状態になっていたそうです。そこで、李清照は、二人で長年に渡って集めた多くの文化財を南京に運ぼうとしました。しかし、動乱の中で、運送する予定だった所蔵品は焼失したり散逸してしまい、清照は命がけで残った文化財を守り、やっとのことで南京にたどり着きました。

さて、都を杭州に移したばかりの南宋政権で、夫、趙明誠は、南京を含む周辺地域の長官に任命されました。ところが、一年あまり経った時、南京では軍の将校による内乱が起きました。偶然、その時の趙明誠はすでに、別の場所の地方長官になる人事異動の辞令をもらったばかりで、元の担当地域への対策を講じずに、逃げてしまったそうです。李清照は夫のこの卑怯なやり方を知って、激怒したと言われています。次の漢詩は、その翌年に書いたものです。攻めてくる金に対して、じりじりと南方に逃げる宋の軍隊を風刺した詩ですが、その詩を書いた時期などを考えると、夫、趙明誠が職務を放棄して逃げたということも非難していたのではないかと、言われています。

xià rì jué jù
《夏日绝句》

shēng dāng zuò rén jié
生当作人杰

sǐ yì wéi guǐ xióng
死亦为鬼雄

zhì jīn sī xiàng yǔ
至今思项羽

bù kěn guò jiāng dōng
不肯过江东

じんけつ
生きては正に人傑となり

きゆう
死しては亦た鬼雄となるべし

今に至りて項羽の

あえ わた
肯て江東に過らざりしを思う

生きる限りは、傑物といわれるようになるべきである。

死んでも、英雄と讃えられるようになるべきである。

今になっても項羽を思い出す。

項羽が烏江を渡って逃げようとしなかったことを。

項羽は、船頭に逃げることを勧められても同意しなかった、英雄として立派だった。それにひきかえあなたは、逃げるなんて、かっこ悪い！ と言いたかったのでしょうか。趙明誠は恥ずかしく鬱々とし、新しい赴任先に向かう途中に亡くなったそうです。

李清照は生涯子供には恵まれなかったようで、詞からは、女性らしいみずみずしい感性や知性を感じます。当時としては珍しく夫と趣味を同じくして仲睦まじい結婚生活を送ったにも関わらず、人生の最後に夫を非難して、それが精神的な打撃となって夫が急逝したとしたら、何とも言えない気持ちになりますね。その後、長続きしなかったとはいえ、別の男性と再婚しようとしたのは、夫君に愛想が尽きていたのかどうなのか。晩年は寂しい寂しいと嘆いたそうで、無邪気なお転婆お嬢様だった李清照の生涯をこの三首で俯瞰してみると、こちらまで切ない気持ちになるのです。



李清照像、清代崔錯画(ウィキペディアから)

4年ぶりの河南省(つづき)

文と写真=村上直樹

昨年 2023 年の 5 月号で 2022 年度の「全国十大考古新発見(発見)」について少し詳しく取り上げた。今年も先日(3月22日)2023年度の十大発見が発表され、河南省関連は2件が入選した(2024年3月22日『新華視点』)。その内の1つは「河南鄭州商都書院街墓地」である。約3400年前の商(殷)代の遺跡であるこの発見は、3年間、15,500平方メートルに及ぶ発掘調査の成果であり、現在のところ中国における最も初期の、構造が明らかな高位貴族の墓地である。

報道でドローンによる空中写真を見ると、発掘現場は私が昨年(2023年)末に見学した「鄭州商都遺跡博物院」に隣接する地区である。時間がなかったこともあるが、工事現場か何かと思い込んで近づきもしなかった。勉強(予習)不足を悔んでいる。

さて、その河南旅行では12月28日に鄭州市から洛陽市に知人の車で移動した。洛陽市(地級市)にはそれぞれ7つの県と区があり、その内の1つに河南省の中西部、洛陽市の北部に位置する孟津区がある。2021年にそれまでの孟津県と吉利区が合併して誕生した。孟津区は4つの街道と6つの鎮を管轄している。鎮の1つは小浪底鎮である。この小浪底という名称は水利目的等で黄河に造られた小浪底ダム(小浪底大壩)で広く知られている。

さらに小浪底鎮には28の村が含まれているが、小浪底村はその1つである。同村の役場(村民委員会)の建物前にあった看板によると、この村は通称、新小浪底村と呼ばれているようだ。その理由は国家プロジェクトである小浪底ダムの建設に際して、もとの小浪底村が全村移転して新しくできたからである。1993年のことである。

もともとの村があった場所から黄河の上流は川床が狭く、激しい流れで波しぶきが上がっているが、村の場所に来ると川床が広くなり、流れも穏やかになって川面も小さい波だけになる。そこから「大浪到頭、小浪到底」(大きな波に始まり、小さな波に到る)と言われ、小浪底の名前がついたらしい。

29日はまず「韓城羊肉湯」という小さな店で朝食をとった。地元では知られている店なのかもしれな



羊肉湯(2023年12月撮影)

い。この羊肉湯は絶品だった(小麦で作った「大餅」を浸して食べる)。私には言葉で的確に表現できないのがもどかしいが、眼で(写真で)ぜひ、味わっていただきたい。

午後には残念ながら霧雨が降る中、ダムを展望台から眺め、小浪底の大きな文字が確認できた。この展望台には「柏崖古城」という石碑が立っていた。南北朝時代(439年~589年)、北朝・東魏の侯景が柏崖山と呼ばれるこの地に黄河を巡る戦略的意図から城を築いた。

侯景は「侯景の乱」で知られる(川本芳昭『中国の歴史』第5巻、講談社学術文庫、2020年、他)。もともと東魏の将軍であった侯景は梁に帰順したが、情勢の変化により548年10月武帝の梁に対して反乱を起こし、その首都である建康(現在の南京)を急襲した。しばらく壮絶な包圍・籠城戦が続いたものの、翌549年2月、ついに建康城は陥落し、梁の武帝も亡くなった。その後551年には侯景は自らを漢帝と称するに至ったが、結局、梁の蕭繹により建康は奪還され、552年4月には侯景も亡くなって、乱は平定された。

この「侯景の乱」は中国の歴史上とくに重大な意味を持っている。この乱以降、南北朝の勢力地図が大きく変化して北が優勢となり、それが漢帝国の滅亡(220年)後長く続いた分裂の時代(魏晉南北朝時代)の終焉と隋朝による統一(581年)に直接繋がってい



班(家)溝の標識(2023年12月撮影)



班超記念館(2023年12月撮影)

く(『百度百科』より)。

話は戻って小浪底鎮に含まれる 28 か村の中には、別に班(家)溝村がある。写真は道路沿いに立てられた村の標識で石板に村の簡単な紹介文が彫られている。それによるとこの周辺は班溝古砦(古城)という7000年ほど前の新石器時代・裴李崗期の文化遺産である。なお、石板には「裴里崗」と表記されていたが、これは誤字と思われる。とくに施設等は見当たらず「河南省文物保护单位、班溝遺跡(班家古砦)、河南省人民政府 2016年1月22日公布、…2018年4月5日立」と書かれた記念碑がひっそり立っていた(写真右奥。人が見えている)。裏面には保護の地域範囲、建築規制等が具体的に記されていた。

時代は一気に6900年ほど下り、同村内には「豫西(河南省西部)辛亥革命記念館」という施設もある。今回、私は見学できなかったが、そこでは同盟会員・辛亥革命東征軍将領・豫西討袁軍司令であった楊体鋭烈士による奮闘と犠牲を知ることができるはずである。

さらに、もう1つ注目すべきことには、同村は「班氏家族的祖居地」である。この班氏家族とは、漢代にさまざまな分野で活躍した彪・固・超・昭・勇らを指している。このうち班固は『漢書』100巻を著した大歴史学者、文学者である。班彪は班固の父親で、司馬遷の『史記』の続編として『史記後伝』数十篇を著した。班彪の娘で班固の妹の班昭も著名な学者で、班固亡きあと『漢書』を最後の部分を書き足して完成させた。

この5人の中で班溝村(孟津区)と最も縁が深いのは班固の弟、班超(32年～102年)である。孟津区朝陽鎮には「班超記念館」という立派な施設もある。写真の扉奥に見えるのは班超の像である。班超は

学者ではなく、政治家、軍人、外交官である。後漢明帝永平16年(73年)に40歳を過ぎるまで文官であった班超は「投筆從戎」(筆を捨てて、すなわち文官を辞めて、軍隊に参加する)とばかり、匈奴などが勢力を張る西域に出陣した。その後、30年に亘って西域に止まりこの地を安定させ、西域各民族と中原漢民族の友好往来の促進に貢献し、多民族国家としての中国の発展の礎を築いた。永元14年(102年)8月に洛陽に戻ったものの、1か月後の9月に享年71歳で亡くなった。

班超の生涯については、南朝宋(420年～479年)の範曄が編纂した『後漢書』の「班梁列伝」に詳しい(この梁とは梁懂という別の人物を指す)。また班超は「不入虎穴、不得虎子」(虎穴に入らずんば、虎子を得ず)という諺の由来でも知られている。これは、36人というわずかな人数ではるかに多勢の相手(匈奴の使者)を叩こうとした際、躊躇する部下を鼓舞するために班超が発した言葉である。

班勇は班超の3人の息子の末っ子で、後漢政権の下にあって父親同様、西域の安定に貢献した。上記の5人の他に班氏の一族として、班彪の祖父の娘で漢成帝の側室(婕妤)であった女性も詩人として知られる(名前は不詳で班婕妤と呼ばれる)。

「班超記念館」における解説等によると、こうした班超による功績は、紀元前138年に張騫^{ちやうけん}が切り開いた西域への道(シルクロード)を引き継いだと言え、2013年に習近平主席が提唱して以来、東アジア、中央アジア、ヨーロッパ等を含む関係諸国との協力強化・共同发展を図るべく、現在、中国政府が進めている巨大経済圏「一带一路」の構築にも繋がるという現代的評価がなされている。

「秦皇島」から「承德」へ

「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(12)

文と写真 吉光 清

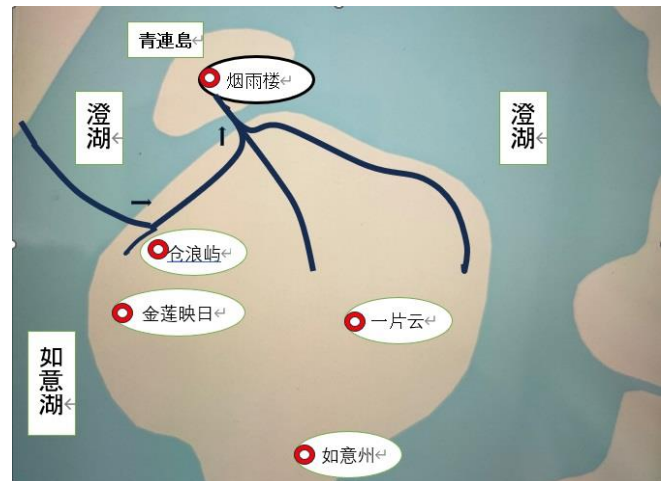
中国四大名園に数えられているのは、北京の「頤和園」、承徳の「避暑山荘」、蘇州にある「拙政園」と「留園」であり、いずれも世界遺産に登録されている。前二者は皇家園林（中国皇帝所有の庭園）であり、後二者は私家園林（中国の貴族・高位官僚や富裕な商人・地主所有の庭園）である（ウィキペディア）。

規模を比べてみると、「拙政園」と「留園」はそれぞれ、5.2haと3ha余りに対して、「頤和園」は297ha、「避暑山荘」は564haと桁違いである。後二者は庭園といっても、皇帝の宮殿、政治を行うための役所やたくさんの社寺を含む複合施設のため、当然と言えば当然である。それにしても、天然の山や湖をまるごと、庭園に取り込むのは、自分の楽しみのためにディズニーランドを作るようなものだと思ってしまう。

否、乾隆帝は母の孝聖憲皇后の還暦を祝い、西湖の西に「高水湖」と「養水湖」を新たに掘削し、3つの湖を合わせて「昆明湖」を造り（乾隆15年）、湖の水は農業用としても利用し、その時に発生した土砂で「万寿山」を造成し、明の時代に造営された「清漪園」を現在の「頤和園」の規模にする改修工事を行った（乾隆29年）ということや、これらと並行して、乾隆22年から「普寧寺」を皮切りに「外八廟」の造営に着手し、北京市内にチベット式寺院を建設、紫禁城内に工芸技術の粋を凝らした建築物を作るなど、「頤和園」と「避暑山荘」という2つの壮大な庭園を実現させた「造園デザイナー」に留まらず、「究極の芸術品コレクター」、「寺社建築デザイナー」、「都市デベロッパー」と言うべき役割を果たしている。その創造に対する飽くなき情熱と実行力、並外れた美的感覚と才能には驚嘆する他はない。なお、「清漪園」は清末期のアロー戦争で荒廃し、西太后が修復して「頤和園」と改称したものである（ウィキペディア）。

■「烟雨楼」を出てから

山地から湖岸まで降りて来て、それと気づかず「中洲の島」に渡ってしまい、地図も見ないままに、「烟雨楼」に辿り着いてしまった。



「烟雨楼」までの経路と「中洲の島」にある5つの景勝地

「青蓮島」から「中洲の島」に戻ると、道は三叉路になっており、ここで手持ちの観光用地図を広げることになった。この島の中に、どのような景勝地、観光施設があるのかと地図で確かめた。

「景点マーク」が5カ所に付けられ、それぞれ「沧浪屿」、「烟雨楼」、「一片云」、「金莲映日」、「如意洲」の名称が示されていた。島と湖岸は南側の長い砂洲（人工？）で繋がっているようである。

島に渡って来た地点の近くに「沧浪屿」という景勝地があったはずだが、歩き始めた道の逆方向にあったらしく、全く気付かずに来てしまっていた。

島の中央部に向かう道ではなく、湖岸を眺めながら歩く道を進んだ。すぐに対岸の林の中に六角形と思われる多層の塔が姿を現した。いかにも中華式庭園の趣であった。地図を見たが、その場所には該当するような塔の名称は見当たらない。（後で「上帝閣」と考えられた）。手前の湖岸には屋根付きの観光船が繫留され、船着き場になっていた。

■朝陽を眺める展望所

湖岸に沿って更に進んだところで、東屋があり、その扁額には「清暉亭」とあった。対岸に最も近づいている地点だと思われ、対岸の景色（往時は船着き場は無かっただろうが）を鑑賞するために建てたと思われる。しかし、ここも手持ちの大ざっぱな地図には載せられていなかった。



「清暉亭」説明盤(下)と対岸の景色(上)

近くに石造りの説明盤があったが、説明自体は極めて簡単な内容であった。曰く、「乾隆亭が優れた景観を定めた三十六景のうち、15番目の景勝地である。早朝に此処で休息を取り、朝の陽光を浴び

ればゆったり、くつろいだ気持ちになることが出来る」。15番目というのは、(札所に付けられる番号と同じく)、素晴らしさに順位をつけた訳では無さそうである。ともあれ、島の東端の岸に腰掛け、対岸の塔や森の上に朝の太陽が昇ってくるのを眺めるのは清々しかったろうと思われた。

そこから先に進み、現れた分岐点で湖岸を離れたら、こじんまりした寺院があった。

■これも“ご神体”？

山門は一層の中華式屋根で、軒下の彫刻の青紫色と門の両側の壁板は光沢があり、赤茶色というより赤紫色に見えた。扁額は青地に金色の文字で「法林寺」と揮毫されていたが、洒落た雰囲気を持っていた。この寺院を確かめようと地図上を探したが、これまた載せられておらず、がっかりした。

山門を入ると正面に正殿が見え、開け放たれた扉



法林寺の堂内に祀られていた像

の奥に、ご本尊の仏像が遠くからでも望まれた。光背にも複雑な装飾がされていた。

本殿に近づくと扁額には「般若相」と揮毫されていた。浅学にして、これが何を意味しているのか分からなかった。

堂内に入ってから、興味を覚えて写真を撮ったのは、「右手の剣を横に構え、左手を上挙げて、右足の膝を曲げ、左足の前に引き上げた」、まるで京劇俳優が見得を決めるポーズのような武将の像であった。その隣は「背中に大きな羽根があり(きっと飛べるのだろう)、閻魔様のような冠を被り、羽毛の飾りの鎧を着け、右手に(金槌?)を持つ、尖った嘴の鳥人」の像であった。まるで、日本の山岳信仰に登場する「カラス天狗」か、ヒンズー教由来の「ガルダ」のようだったと思った。これも意味が分からなかった。

後に「般若相」について調べたところでは、「般若相」とは「仏陀の至高の知恵」を意味し、寺門には康熙帝が「法林寺」と揮毫した扁額が掛けられ、山荘内で最も早期に創建された寺である。乾隆三十六景のうちの16番とされ、正殿に無量寿仏、東殿に雷神、西殿に龍王が祀られ、皇帝と妃嬪たちはお参りを欠かさなかった(「百度百科」より)。

■「如意洲」が「中洲の島」の名前か？

地図では、此処から島の中央部に進めば「一片雲」という観光ポイントがあるようだった。しかし、手持ちの地図では道路が全く省略されているので、行き当たりバッタリで歩いて行くと、途中で引き返す羽目になりそうだった。

残る観光ポイントのうち、「金連映日」は島の西側で、「清暉亭」とは反対の位置関係にあり、夕陽が沈む時分に周りが金色に輝くという意味だろうかと思った。しかし、どんよりした天気で綺麗な夕陽は期待できなかったし、それに、其処で夕陽を見てしまったら、日が暮れた山荘内を歩いて帰ることになりそうで、それは避けたいことだった。

「如意洲」の景点マークは「中洲の島」と陸地を繋ぐ砂州の上に付けられていた。「長い砂州が作り出す独特の景観」が景勝地とされた理由だったかと思いつき、そうだとすれば、この「如意洲」こそ「中洲の島」の呼称かと思いついた。(つづく)

●資料:「承德市城区导览图」、中国地图出版社

新郎に贈るあでやかな手縫いの衣服

訳：一瀬靖子／大槻一枝

朝鮮族の娘は、結婚する時、自分で手作りした沢山の嫁入り道具を持参しなくてはならない。松竹明月の縫い取りをした箆笥掛け、“福”“寿”を縫い付けた丸い枕、また、舅、姑、小姑への贈り物などで、その中でも欠かせないのは、新郎に贈るあでやかな、丁寧に縫い上げた衣服である。

「どうしてこんな風習があるのか」と問う者がいるかもしれない。それには、国王の名代として各地を巡回する、悪人には怖れられる公使の隠密巡視の物語がある。

~~~~~

昔、朴公使は、国王が自らしたためた“玉牒馬牌”を国王の信任の証として携え、身には破れた長衣をまとい、頭に古い笠をかぶり、腰は荒縄で縛る出で立ちで、国中を巡視した。一つの地方に着くたびに、皇帝の名代として、人を殺した者はその首を刎ね、汚職した者は厳罰に処し、また国に忠義を尽くした者、父母に孝行な者は表彰するのであった。

さて、公使がある村にさしかかると、垣根の内から老人と若者のひそひそ話が聞こえて来た。公使は耳を垣根に当てて、中から伝わってくる声を盗み聞いた、「息子よ、この世の中は本当に不公平だ。あの両班（ヤンバン・封建時代の朝鮮の貴族）が死んだのは、彼自身の寿命だったのに、無理矢理あの新郎に殺されたところじつめた」。息子は大きくため息を吐きながら、「父さん、これは我々にはどうしようもないことです。今は両班の天下、彼らが殺そうと目をつけた者には、助かる望みはないのです」。

朴公使はこれを聞いて不審に思い、垣根をぐるりと回り、門を叩いて「私は通りがかりの者ですが、冷たい水を一杯いただけませんか」と声をかけた。若者が公使を招き入れ、一杯の水を差し出した。公使は一気に水を飲み干すと、煙草をキセルに詰めながら「私は道々この地方で殺人事件が起きたと聞きましたが、事情を知りませんか？」と訊いた。

息子はこれを聞くと怒り出し、「このおいぼれが。なぜ、私ら親子の話を盗み聞きしたのだ！」と腕を振り上げて公使を追い出そうとした。父親は息子を遮り「聞かれてなぜ悪い？ お前、ご無礼してはいけないよ」となだめ、公使に実情を話した。

「この村に中流の家庭があり、生活は豊かとはいえないが、娘は人品容貌とも抜群で、父母は彼女を遠方の若者に嫁がせようとしていた。結婚の日を聞き知った街の両班がやってきた。この両班は京城の宦官の孫で、この日も彼は肩で風を切って娘の家にやって来たのである。丁度、新郎の父親が新郎に付き添って娘を迎えに来ていた。両班は入るや否や、威張って祝い酒を所望した。娘の父母は怒りを抑えて酒を差し出した。両班は飲みながら何やかやと難癖をつけて、すっかり酔いつぶれ、ふらふらと立ち上がると新郎の父親に掴みかかり、殴ったり蹴ったりし始めた。新郎はこれを見かねて素早く近寄り、両班を引き離して押し返した。酔いの回った両班は、よろよろと数歩歩いて倒れこみ、数回、体を震わせると首を垂れて死んでしまった。話を聞いて駆け付けた両班の親戚知人が激怒し大暴れして、婚礼をぶち壊した。娘の父母や新郎父子も殴られ、村役場に告訴された。新郎は捕えられ重い首枷を嵌められ、殺人罪に問われた」。父親は話し終わり、長い溜息をついて、「新郎はすぐ首を刎ねられる。隠密公使が近くに来ておられれば、新郎を救うことも出来るだろうが、公使は今どこにおられるやら」。

朴公使は、聞き終わると、その日は近くに宿をとり、翌日町へ行って新郎を助けようとした。夜が明けると同時に出発し道を急いだ。と、まもなく後ろから若者が駆けてきて彼を追い越そうとした。見ると身には真新しい新郎の礼服をまとい、汗にまみれて走っている。朴公使はいぶかしく思い若者を呼び止め、「そんなに慌ててどこに行くのかね」と声をかけた。若者は、「昼 12 時 45 分、刑場で冤罪の若者が首を刎



農民の仕事ぶりを寝そべて眺める両班  
(ウィキペディアより)

ねられる。私は彼を救わなければならない」と答えた。朴公使は聞き捨てならぬと思い、必死で彼を引き留めながら、「私に分かるように説明してくれ」と頼んだ。その若者は前日、「両班を死なせた」とい

う罪名で投獄された新郎本人であった。いきさつは、前日深夜、誰かが獄卒を買収し、目出し帽を被って獄中に忍び込み、自分の着ていた衣服を脱いで、死刑宣告を受けた新郎に着せて脱獄させたのであった。突然のことで、新郎は侵入者を見分ける余裕もなく、懸命に着替えて家に帰り着いたが、そこでハッと気付いた「あの若者は私の身代わりになろうとしているのだ！ 思わず逃げてしまったが、あの若者こそ無関係で何の罪も無い、死なせてはならない」。

「間に合わなければ、彼が首を刎ねられる。一刻も早く刑場に行かなければならないのです」、聞き終わって朴公使は深く感動した。自分の命を賭して、冤罪を被って刑死させられる命を救助しようとした若者の行為は美德である。そして、脱獄して命を救われた者は、自分が冤罪でも他人の命を身代わりには出来ないと、その善意を拒もうとしている。朴公使は感動して、若者と共に刑場へ向かう道を急いだ。彼ら二人が町役場の門前に駆けつけると、まさに12時45分になろうとしていた。

新郎が大声で叫んだ。「死刑執行の方々、待って下さい！ 本当の殺人犯は私なのだ！」。キラリと光る太刀を振り上げようとしていた執行人の手が止まった。朴公使は密かに執行人を呼び、「玉牒馬牌」を取り出し、死刑執行を差し止め、同時に役場前で声高に、「隠密公使ご来臨！」と宣告させた。役人どもは驚き、顔色を変え、一斉に地面にひれ伏した。

朴公使は役人に「早く二人の新郎を連れて参れ」と命じた。九死に一生を得た偽の新郎は震え恐れなが

ら町役場に護送されてきた。本物の新郎も広間に呼ばれ、顔を上げると、何と役場まで道連れだった人が上座におられるではないか！ 新郎は驚き喜んだ。朴隠密公使は「おまえは町を治める長だな。殺人犯に対する死刑判決を下したが、彼らの内どちらが本当の殺人犯なのか？」と問い糺した。その役人は跪いて地面にひれ伏し、「実を申しますと公使様、私は両班家から賄賂を受け取り調べをせずに、新郎を死罪としましたので、どちらが真犯人か、見分けられません」と白状した。

公使は「両班の死体を運んで参れ」と命じ、両班の死体を広間に運ばせた。自ら牢獄に入り、命を賭して新郎を助けようとした若者に、「そなたはなぜ命を捨ててまで死刑囚の身代わりになろうとしたのか？ 二人はどんな関係なのか？」と訊いた。牢獄から出された若者は「申し上げます、公使様。私は許婚を救おうとしたのです」と答えた。公使が更に、「許婚を助けるのに、なぜ男装をしたのか？」と訊くと、「許婚は捕らえられて投獄され、三日後には首を刎ねられ、晒し首になると聞きました。これを聞いた父母は、家中のありったけの金銀を集め、町役場に届けさせ、彼を助けようしました。私は一日中、牢獄の周りを歩き回りましたが、許婚と会うことは出来ませんでした。『仕方がない、彼を救い出せないなら、彼と入れ替わって私が死のう』と思いました。許婚は学問もあり、牢獄を出たら、人のために役立つ。そう考え、私は許婚のために縫った服に身を包み、牢獄に忍び込んだのです」。

公使はこれを聞いて両班の死体に向かい、大声で「新郎はお前を一回も殴っていない。それなのに、お前は地面に倒れて人々を驚かせた。力いっぱい百叩きだ！」、役人が鞭を振り上げて百回叩くと、公使は更に「彼はもう打たれて死んだ、運び出し、どこぞの墓地に放り出し、屍を荒野に晒せ！」。

次いで、新郎の無罪放免を宣告し、人々の心を鎮めるための布告を出し、新郎新婦には改めて婚礼を上げさせた。娘の美德は人々から称賛され、多くの娘が彼女に倣って結婚の時には、新郎に最も良い服を贈るようになった。これは忠節、貞操を表わし、次第に風俗、習慣となり広まっていった。

(中国東北部朝鮮族に伝わる民話) 整理：吉雲

# 女子教育のパイオニア・津田梅子(1)

和田 宏

## 〈津田梅子の生涯〉

津田梅子（1864年12月～1929年8月 享年64）は、徳川一門や譜代大名が封ぜられた下総佐倉藩の家臣で農学者・津田仙の次女として、元治元年12月3日（陽暦1864年12月31日）に、江戸牛込南町（新宿区）で生まれた。名は「むめ」。

1871年（明治4）、6歳11ヶ月で、岩倉具視遣外使節団に加わり、日本最初的女子留学生として、アメリカに渡った。11年間のアメリカ滞在を経て、1882年帰国。華族女学校（現・学習院女子高等学校）教授を務めた。

1889年25歳の時、在職のまま、再び渡米し、3年間プリンマー大学で学んだ後、女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）教授にもなった。

また、1898年（明治31）アメリカのデンバーで開かれた「万国婦人クラブ大会」に、日本代表として出席し、女子の高等教育や自立の必要性を演説した。

1900年35歳の時、華族女学校、女子高等師範学校を辞職して、自らの長年の理想だった英語教育とキリスト教による人格教育を中心とする女子の為の学校「女子英学塾（現・津田塾大学）」を創立し、女子の高等教育発展にその情熱を傾けた。

梅子は、生涯独身で通し、1929年（昭和4）8月16日、64年8ヶ月の生涯を静かに閉じた。その日の日記に書いた“Storm last night（昨夜、嵐）”が絶筆であった。

梅子の肖像の載った5000円札が、2024年7月3日に発行されることになった。お札に肖像が採用されているのは男性が15人で、女性は、1881（明治14）年の神功皇后が最初で、2004年の樋口一葉、そして3人目が津田梅子となる。

## 〈『梅』と言う名前〉

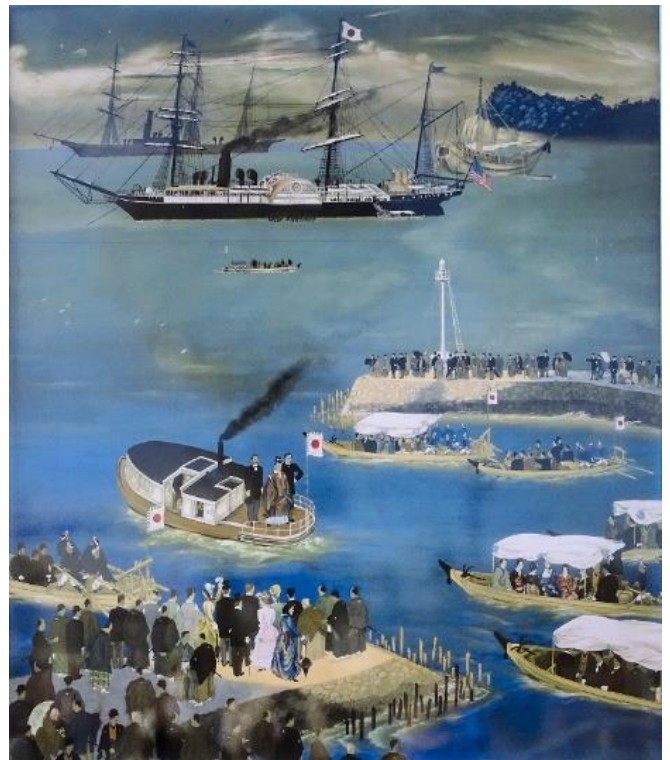
『梅』という名前は、父親の仙が、“又、女が生まれたのか!”と見向きもせず、その日は帰宅しなかった。やむなく、母親の初子が枕元の盆栽の梅

が二、三輪ほころんでいたのに因んで、『むめ』と名付けた。旧日本語では『むめ』と表記することもあるが、『うめ』と同じ。1902年（明治35）に「梅子」と漢字に改名した。

梅は、全ての花に先駆けて咲く“万花の魁”と言われ、良い名前だと私は思う。仙は、妻の初子との間になんと男5人と女7人を、別の女性との間にも男1人を作っており、子供は計13人いた。

## 〈最初の渡米〉

梅子は、日本で初めての女子留学生として、山川捨松（12）、永井繁子（9）、上田梯子（15）、吉益亮子（15）の4人の女性と一緒に、岩倉具視遣外使節団に加わり、1871年12月23日（明治4年11月12日）正午、横浜港から蒸気船「アメリカ丸」で渡米した。梅子は最も小さい6歳11ヶ月だった。帰国する米国代理公使ディロングの夫人が、世話役として付き添った。出航の時、横浜港には大勢の見送り人をはじめ、34発の祝砲が轟き渡り、



横浜港沖合に停泊しているアメリカ丸に向かう  
岩倉具視と津田梅子ら（photo-kataru.com より）

大変な賑わいとなった。24日間かかった太平洋横断の「アメリカ丸」の船上で、梅子は7歳になり、1872年1月15日サンフランシスコ港に到着。更にアメリカ大陸を横断して、10センチ程の積雪があったワシントン D. C. に辿り着いたのは、1872年2月29日で、横浜港を出発してから69日目だった。

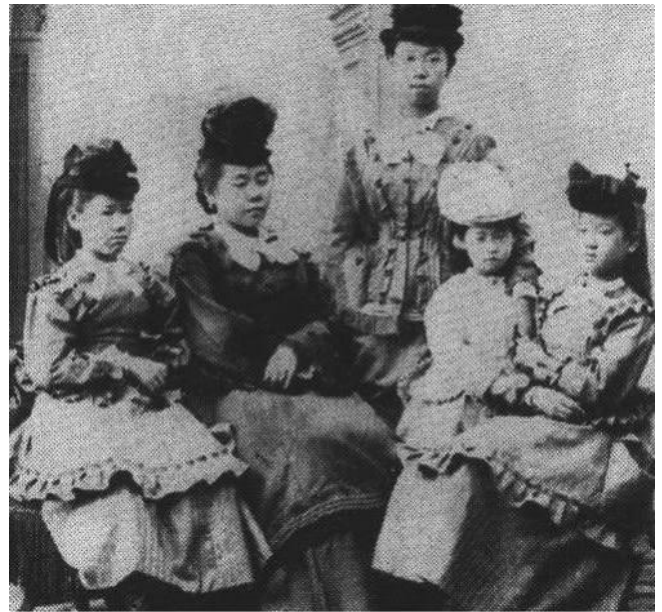
英語もしゃべれない小さい子どもを、遠いアメリカへ留学させるなんてとんでもないと、世間の人からは鬼のような両親だなどと批判を受けたが、父親の津田仙の決断によるものだった。実は仙自身が、アメリカに渡った経験があって、日本の将来を考えて、はっきりした目的を持って自分の娘にアメリカへ行って勉強してもらいたいと考えていたからだ。それには経緯があった。

1853年7月8日（嘉永6年6月3日）、アメリカのペリー艦隊、所謂黒船4隻が浦賀沖に現れた時、仙は16歳の少年だったが、堂々たる黒船に接して米国艦隊が非常に優れていることを知り、自分も海外の事情を勉強したいと思って江戸に出た。仙はジョン万次郎がアメリカから持ち帰った『初等英文法問答』という本を、西周から借りて勉強した。その後、アメリカの最初の駐日代表として下田総領事となったタウンゼント・ハリスの通訳ヒュースケンから英語を学んだ伊藤貫斎が開いた神田神保町の英語塾で学んだ経歴があった。

仙は王政復古の直前の1867年1月、梅子が2歳の時、幕府の外国奉行の通弁として、5ヶ月間アメリカに行った。更に、梅子を送り出した2年後の1873年ウィーンで開かれた万国博覧会に農業の知識と英語力をかわれて、書記官として参加もしている。従って、梅子のアメリカ留学は、父親・仙が、優れた海外事情を娘も知るべきだという願いが起因なのだ。仙は、もともと農学者であり、1876年1月には、麻布に「学農社農学校」を開設し、畑ではアスパラガスやイチゴなど野菜を自ら栽培して売り、大儲けした。北海道開拓使の役所でも働いた。

#### 〈アメリカでの育ての親〉

梅子は、ワシントン D. C. 郊外にある日本弁務使館（今の大使館に当たる）の書記として働いて



洋装した留学生5人 シカゴで(1872年2月)  
右から2人目が梅子( wikipedia より)

いたチャールズ・ランメン氏の家に預けられ、子供のいなかったチャールズとアデリン・ランメン夫妻の元で11年間、梅子は、あたかも我が子のようにして育てられ、アメリカの学校に通った。

梅子はワーズワース、バイロンの詩を学会会で暗証し、シェイクスピアの戯曲を読み、日記も英語で書くのは勿論、ラテン語、数学、物理学、天文学、フランス語に抜群の成績を示した。1873年7月13日に8歳で自ら進んでキリスト教の洗礼を受けた。

梅子はランメン夫妻を“アメリカの両親”と慕い、1882年から1911年までの30年間に亘って、数百通の手紙を書き、自身の近況や誰にも言えない色々な悩み事などを書き綴り、相談に乗ってもらった。

#### 〈アメリカから帰国〉

梅子は1882年11月21日、17歳11ヶ月になって10年11ヶ月ぶりに横浜港に帰り着いた。帰国後間もないある日、梅子が人力車に乗っていて忘れ物に気付き、車夫に“ちょっと、止めて”と言おうと思っても日本語が出て来ず、困っていたら、たまたまアメリカ人の知人が通りかかったので、通訳を頼んで何とか用が足せた。それからというもの、このアメリカ人は、梅子の顔を見る度にアベコベで“す”と言ってからかった。当の梅子は、その“アベコベ”の意味が解らなかった。 つづく

# 台湾で山登り、そして地震に遭う

佐々木 健之

2024年3月31日から4月6日まで、観光登山で1人で台湾に行きました。九州より狭い台湾には3000m以上の山が200座以上あります。ほとんどの山はそれなりの体力・技術が必要ですが、車道が3000mを超えているところが有り、そこからスタートすると楽々と登れる山がいくつかあります。今回はガイドのスーさん(2018年に私が玉山行ったときのガイド)に車運転と案内を頼んで、「合歓山東峰3421m」、「石門山3237m」、「合歓山主峰3417m」の3山を中腹のホテルから日帰り登山して、2日で廻りました。どの山もスタートの登山口は3000mを越えているので、高度障害で呼吸が苦しいのを別とすれば体力的には簡単です。

中腹のホテル「清境国民賓館」は、なかなかしゃれた佇まいでした。この賓館の前身は、国営農場。当時の作業員は中国大陸から蒋介石軍に従軍してきた退役軍人です。蒋介石は大陸反攻を目指しましたが共産党軍に夢破れました。帰国できなくなった従軍老兵は妻子を故郷に置いて参戦したものもいます。彼らが独身のまま老いるのは具合が悪いと、治安と福祉目的で開いた国営農場でした。今は老兵は逝ってしまい、周辺施設は、一大休暇村となっています。標高1700~2000mの斜面には牧場や、茶園、薬草園、遊覧施設などが有ります。宿泊施設「清境国民賓館」の建物は、しゃれた西欧風の建物でした。これで、温泉が付いていれば満点なのですが…。

登山1日目の4月1日は霧と小雨でのなか、合歓山東峰(3,421m)に行きました。翌4月2日は晴天でしたが風強く寒かったです。石門山(3237m)、合歓山主峰(3417m)をべつべつに登り、登山予定をこなし



中腹の宿、清境国民賓館

ました。台湾はハイマツが無く、森林限界上部は笹原で四国の高山のようでした。

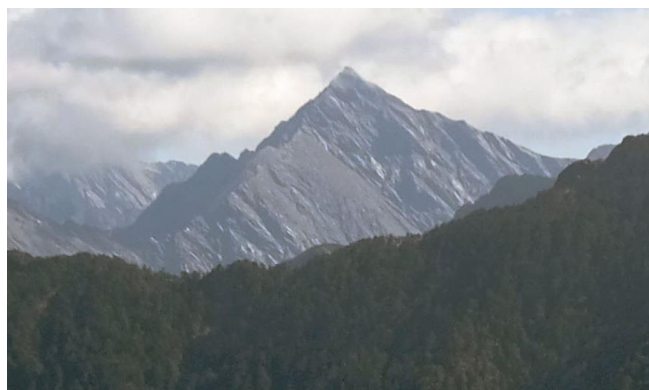
一帯はシャクナゲが綺麗なところなのですが、まだ蕾でした。遠景では台湾第四の高峰、中央尖山3,703mが、かっこよかったです。

登山のあと「清境国民賓館」付近まで戻り、近くの雲南料理店で昼食をとりました。あたりは雲南料理店が多く、それは国民党の老兵に雲南省出身者が多かったからだそうです。

食後はスーさんの車で、台湾の地理的中心といわれる「埔里(pǔlǐ)」という街まで送ってもらい、連泊予定の「亞締旅店」にチェックインして台北に帰る彼と別れました。

宿に荷物を置いてから、散歩がてら翌4月3日に明日に乗るバスターミナルを確認しました。埔里の街は歩道が無いところが多く、そればかりか道路に沿って車やオートバイが切れ目なく駐車しているので散歩には不向きです。車や、オートバイを回り込まないと進めません。おまけにこの日から台湾に熱波襲来で、30℃です。高山登山の時は8℃くらいで寒かったので体が驚いていました。

夕食は「鳥居」という日本風の食堂に入りました。今考えると変な食堂でした。入り口に大きな鳥居があって、小道が母屋の食堂に続いています。母屋に付随して小間物屋みたいな土産物屋がありました。食堂に入った時はほかの客はいませんでした。メニューは定食がほとんどで、私はサバの一夜漬け定食を頼みました。前払いでした。サバはおいしかったです。他に盆に乗った小鉢物がいろいろあって、食材の



台湾第4の高峰、中央尖山(3,703m)

種類や味付けなど結構手が込んでいました。ただし、日本のそれとは、ちょっと味付けがずれていて面白かったです。鳥居の由来は、日本統治時代はこの場所が材木屋で、もともと鳥居があったそうです。食堂を開くときに鳥居を看板代わりに拝借したというわけ。食後はホテルに帰り洗濯などしました。

明けて4月3日は一人で登山です。場所は観光地の日月潭近くにある後尖山。バスは9時30分発でした。ホテルからバス停までは10分程度ですが、9時出発と心づもりをしてのんびり出発準備をしていました。準備と言っても菓子パンと飲み物、果物少々をデイバックに入れるだけです。

そろそろ出かけようかと思ったとき、いきなり「ウーッ、ウーッ」とスマホががなり立てました。日本にいるときに聞きたくないけれど、聞いたことのある「地震警報音」でした。どうして台湾なのに警報が鳴るのだろうとは後で考えたことです。警報音に続いて「地震がきます…」といった内容の日本語。正確な文章は覚えていません。日本語音声の次は英語でしゃべっていました。帰国してから見たスマホの緊急警報履歴ですと、8時58分でした。

とっさに、これはヤバイぞ思ったとたん、すぐに縦揺れがきました。揺れとともにガタガタと建物全体が音を立てています。とりあえず少しでも柱がたくさんあるところへと、入り口ドアの前、カードキーの差し込みがあるあたりに移動し、両手を壁に突っ張って振動に対応しました。その場所がどの程度地震に強いかは怪しいですが。

私の部屋は8階建ての6階でした。振動中は倒壊したビルの写真などか頭の片隅に浮かび、困ったことになった、早く終われと念じました。幸い時間にして数秒か、十数秒で揺れは収まりました。

しばらく呆然としていましたが、いったい地震の規模や震源地はどこだろうと思い、台北に居るスー



後尖山(1008m)山頂から見た日月潭。スマホで撮影



地震直後のスーちゃんとのlineやりとり。文字は拡大しています

さんにラインでまず「我OK」と送り、次に「地震どこ?」と送りました。

するとすぐ返信が有り「めちゃくちゃ大きい地震」とのこと。追って9:04に花蓮付近震源地の地図を送ってきました(左図参照)。

揺れが収まり、部屋の中を見ると落ちたものは無く、壁

も異常がないようでした。建物も大丈夫らしい。ただ、時計代わりに点けていたテレビの画面が暗くなっていました。電圧が下がったのでしょうか?そして音声が出なくなっていました。日本のテレビだとすぐに地震速報が画面に出るのですが、放送中の番組では地震のことは出ていませんでした。地震速報放映がまだ間に合わなかったのでしょうか。

埔里の街は被害が無いようなので、登山ができそうだと、行くことにしました。すでに9時10分を過ぎています。バスに乗り遅れてはと、リックを背負って廊下に出ました。エレベーターの前に女性が2人立っていました。怖くて飛び出したのでしょうか?エレベーターは扉が開いていて、これはよかったと乗り込もうとしましたが、緊急停止中でした。

階段を使って6階から地上に降り、バスターミナルへ行きました。バスは時刻通り運行して、登山口の「頭社」まで40分で到着しました。

ホテルを出てからすぐに気が付いたのですが、カメラを部屋に忘れました。それと「掃除不要札」の札をドアに下げるのを忘れしました。部屋の中は散らかっていて、洗濯済のシャツやパンツがロープに干してあります。これを見られては困りますが、私の中国語ではホテルに掃除不要の説明は無理です。

バスを降りてから、台中の老朋友(奥様は日本語教師)にラインの音声電話で事情を説明し(なかなか意味が通じなかった)、ホテルに「部屋掃除なし」を連絡してもらって、恥をかかないで済みました。

この日も暑く、スマホで写真を撮ろうとしたら「温度が高いので撮影不可」と何度か表示されました。ポケットのスマホが陽にあたっていました。



## プリンセスの住まい 久邇宮邸・李王家

文と写真＝福島裕子

女性の多くは人の住まいに興味がある。それがプリンセスの家とあらばなおさらだ。私は大学で住居学を学び、結婚後にハウスメーカーでお客様のマイホーム造りをお手伝いした。仕事を離れ、子育てと介護も卒業した今、アートと建築散歩を趣味の一つとしている。

都内に現存する宮家の邸宅は四カ所。洋風建築では旧朝香宮邸（東京都庭園美術館）、旧竹田宮邸（グランドプリンスホテル高輪・貴賓館）、李王家の邸宅の三カ所。和風建築は旧久邇宮邸のみだ。仲間との建築散歩でその全てを踏破した。今回は久邇宮邸と李王家の邸宅について紹介したい。

### ●聖心女子大学のパレスとクニハウス

久邇宮（くにのみや）邸は香淳皇后（昭和天皇のお后）のご実家だ。広尾の高台、聖心女子大学のキャンパス内にある（普段は非公開）。1918年に建てられた本館は翌年、西洋館部分が焼失してしまった。そこで1924年、その跡地に御常御殿が建てられた。この和風建築と焼失を免れた小食堂を合わせてパレスと呼んでいる。

竣工当時を偲ぶ建造物として、表玄関の車寄せと正門も残っている。車寄せは威厳ある唐破風屋根を持つ建築でクニハウスと呼ばれている。良子（ながこ）女王はお輿入れの際、この車寄せから出立されたと言う。

### ●和と洋の見事なコラボレーション

やはり創建当時から残っている小食堂と次の間



パレス（聖心女子大学）

（建築面積 291m<sup>2</sup>）は宮家造営課の設計。床は寄木張り、折上格天井には18点の天井画が嵌め込まれている。いずれも当代随一の画家たちの手によるものだ。大理石のマントルピースの左右には書棚と火灯窓が設けられている。次の間の襖には、たわわに実った柿の木が描かれている。小食堂と次の間にはそれぞれグランドピアノが置かれていた。往時はここでサロンコンサートが開かれたことが想像される。

御常御殿（建築面積 420m<sup>2</sup>）は宮家の日常生活の場だ。1階は両殿下の居間と寝室（共に畳敷き）、衣裳室、浴室、化粧の間などがある。2階には殿下の居間と書斎・内謁見室などがある。蓄音機とレコードを取める作り付けのキャビネットや書棚も設けられている。また南面の廊下は全面ガラス窓で、ここから東京湾が眺められたそうだ。

設計は森山松之助。彼は東大建築学科で辰野金吾（東京駅を設計）に学んだ。30代後半から長らく台湾総督府に務め、多くの官庁建築を手がけた。新宿御苑の台湾閣（旧御涼亭）も彼の作品だ。

### ●李王朝最後のプリンスの館

まだコロナのさなか、文楽を見た帰りに友人たちとラ・メゾン・キオイでお茶したことがある。このレストランは赤坂プリンスクラシックハウスの中にある。

この洋館は朝鮮王朝最後のプリンスとプリンセスのために1930年に、紀伊徳川家の屋敷跡地に建てら



旧竹田宮邸洋館

れた。設計は宮内省の工務課長と技師が手がけたもので、外観はチューダー様式(旧前田侯爵邸洋館と同様)。

1階は広間、客間、食堂、ビリヤード場。2階は寝室や書斎などプライベート空間。玄関横には大理石のレリーフ、階段ホールには優美なステンドグラスが設置されている。

関東大震災を経験した建築家たちは、こうした洋館には堅牢な造りを施した。重厚な壁と繊細で華麗なインテリアとのギャップもまた、この邸宅の魅力だ。

### ●歴史に揉まれる李王家

韓国の王朝、李王家は明治末、日本に併合されて宮家の一つと見なされた。最後の皇帝の跡継ぎだった李垠(アイコン)は日本に留学し、陸軍士官学校卒業後、梨本宮伊都子妃の娘、方子(まさこ)女王と結ばれた。

二人は結婚後すぐに男子に恵まれるが、その子をお披露目するために連れ帰った韓国で死なせてしまう(毒殺説あり)。方子妃はその後流産を経て、一子に恵まれる。母親の仕掛けた縁談だったが、二人の仲は睦まじかったようだ。

李王家を含む11の宮家は、敗戦の2年後に皇籍離脱を余儀なくされる。王族としての身分を失い、巨額の財産税を課されて、李垠はやむなくこの屋敷を西武グループに売却する。

### ●梨本宮伊都子妃の日記

久邇宮と李王家の邸宅について興味を持つきっかけとなった本がある。林真理子が著した『李王家の縁談』だ。この小説は、方子女王を李王家に嫁がせた母、伊都子妃の日記を元に書かれている。筆まめな彼女は17歳になる1ヶ月前から、なんと77年間日記



クラシックハウス (旧李王家邸宅)

を書き続けたそう  
だ。

表紙中央の麗人が伊都子妃その人、右上が娘の方子妃、その下が李王世子(李垠)、左下のカップルは李王世子の腹違いの妹の徳恵(トケ)と夫の宗伯爵。

伊都子妃は肥前佐賀藩11代藩主、鍋島直大(なべしまなお

ひろ)の娘だ。直大がイタリア特命全権大使だった時にローマで生まれたため、伊太利の都で生まれた子=伊都子と名付けられた。1900年、梨本宮守正王と結婚し二人の娘に恵まれる。

### ●宮家の縁談の進め方

この小説は、昭和天皇が皇太子だった頃、そのお后に久邇宮良子女王が内定したことをきっかけに始まる。良子女王と方子女王は従姉妹同志で年も近い。皇族の女王の縁組は10代半ば頃には決まるものらしい。伊都子妃は娘が皇太子のお后候補にならなかったことで焦りを覚える。

彼女は娘を華族に降嫁させるのでなく、皇太子に対抗できるような相手と妻合わせたいと願い奔走する。そこで彼女は宮家と同等と見なされていた李王家にターゲットを絞るのだ。伏線は彼女の欧州の旅にあった。

彼女の夫の梨本宮守正王がフランス留学を終えて帰国する際、夫婦で欧州の王家を訪問する旅に出かけた。ヨーロッパの旅を終え、ロシアからアジア経由で日本に帰国する際、アジアの貧しさに伊都子はガッカリしたようだ。しかし韓国は違っていた。李王家の皇帝は二人を歓待し、お后は流暢な日本語で会話したそうだ。当時日本に留学していた皇帝の弟が、王世子李垠(アイコン)だった。

なかなか興味深い小説なので、手にとって読んでみて欲しい。方子妃の婚姻のみでなく廣橋伯爵に嫁いだ次女の規子(のりこ)女王と、李王家の最後のプリンセス徳恵(トケ)の結婚についても描かれている。宮家の妃の目から見た歴史の一コマを見ることが出来る。



本の表紙  
(文藝春秋社 2021年刊)

## 第 209 話 大体わかった

二人のアメリカ人がスペインを旅行しました。ある日、小さな村の食堂で昼食を摂ろうと思いました。しかし彼らはスペイン語が出来ません。食堂の従業員も英語がわかりません。

彼らはサンドウィッチと牛乳が欲しかったのですが、あれこれ言ってみても全く通じません。

暫くして、二人のうちの一人が良いことを思い付きました。彼は紙を取り出して、そこへ牛の絵を書きました。すると従業員が書き終わる前に、ほとんどわかったようで、絵を書き終わらないうちに、身を翻して出て行きました。

絵を書いた男は、外国で言葉が分からない時は、鉛筆が役に立つと得意げでした。

暫くして従業員が戻って来ました。しかし、彼女の手には牛乳ではなく、2枚の闘牛の入場券が握られていました。

## 第 210 話 他人は命があるのに私は無い

昔、ある所に「誤字名人」と言われる親子がいました。ある時、息子が商売で地方へ出かけると、急に大雨になって、息子は父親に手紙を書きました：

「父さん、雨が続いています。他の人は命(傘)を持っているのに、私は命(傘)がありません。どうか命(傘)を持って来てください。或いは命(傘)を買うお金を持って来てください。あなたの息子」



## 第 211 話 一日中食べている

小張：「隣の人たちは一日中食事をしているんだよ」

小李：「そんなことないだろ」

小張：「朝学校へ行く時と夕方学校から帰る時、いつも隣の家の前を通るんだけどその度に、ご飯を食べていたよ。いつも食べているらしいよ！」

## 第 212 話 豚肉とバター

豚肉が大嫌いな将軍がいました。ある日、彼が上官に挨拶に行くために馬に乗った丁度その時、近くで部下が二人けんかをしているのを見かけました。将軍は、厨房から豚肉と餅(パンの一種)を持って来させ、喧嘩していた二人を呼び出して、喧嘩の罰として、それを食べるように命令し、二人に言い渡しました：「もし再び喧嘩するようなら、更にバターを加えるからな！」



## 第 213 話 字の解釈

ある人が、元旦に年賀で外出する時、思いました：「今日は年の初めだ。幸先の良い日にしなくては。ご馳走がいただけるだろう」

テーブルの上に「吉」という字を書いて出かけました。ところがどうしたことか、10軒もまわったのに、どこの家でも、ご馳走どころかお茶一杯頂けずに帰って来ました。

テーブルの上の字を逆から見ると、「口干」と書いてあるのを見て、「そうか！ 道理で、何も頂けなかったのか。これに早く気が付けば良かった。私の代わりに十一(土)人がご馳走に預かったに違いない」

## 春宵といえば

後藤芳昭

皆が待ち望んだ春も過ぎて今や初夏ですが、過ぎた春をしのいで徒然に感想を述べます。

中国では、春季を1月、2月、3月とします。そしてそれぞれ孟春、仲春、季春と称し、「三春」とも称します。滝桜で有名な福島の三春の地名の由来と関係があるのではないかと密かに想像します。

さて、漢詩で春宵とくれば、蘇軾の春夜です。

## 春宵一刻值千金 花有清香月有陰

の名句は、春の夜の価値ある一瞬を見事に歌い上げました。

どんな価値があるか？を花の清い香りや月の光りにあるとしたわけです。

日中の春の価値は、だれしものが感得しますが、夜の価値は、言われればそうだと納得します。だからこそ今日までえいえいとして読み継がれてきたと思います。

花の香は疑う余地はないのですが、月有陰の解釈として、多くは、朧月説を取っています。

花の香と月の陰を考えると、月に雲がかかる朧月夜ではなく、月の光とすべきではないか？と思います。辞書で「陰」を調べると、月または月光との説明もありました。

曹操の短歌行に「明明如月」とありますが、月は明るいと広くとらえられていたと考えられます。そうすると朧月どころか淡い月光でもなく明るい月光としたらどうなるか？

花の清らかな香りと明るい月の光  
すると続く、

## 歌管楼台声細細 秋千院落夜沉沉

明るい月光で歌や管弦楽の楼台や中庭のブランコがよく見えるわけです。しかもそれらが、あっという間に音が消え入り、ブランコで遊ぶ人もいなくなり夜が深まる。

この一瞬の春宵を現代中国語でも「春宵苦短、

还聊什么呀！」(春の宵と苦勞する時間はあっという間、まだ何しゃべっているの?)と行動をせかす際に使われています。

## 地球温暖化の影響

M.T.記

最近、二つの理由で、テレビのニュースを見るのが辛くて、途中で消してしまいます。

原因の一つは勿論、戦争です。どちらも力の強いものが弱小地域を攻め立てています。きっかけや、歴史的背景はともかく、そして、事態がそう簡単ではないことを承知の上で、敢えて言えば、力の強いものが笠に着て攻撃しているように見えます。相手を殲滅しなければ気が済まないのは、指導者が臆病なせいでしょうか？

もう一つは、冬眠から覚めた熊の出没です。地球温暖化のせいでも早く目覚めても、山の中には未だ食べる物が無く、餌を求めて里に近づくのでしょう。子熊を連れた母熊が罾にかかったり、逃げ惑う姿を見るのはつらいですね。我々に出来ることはないのでしょうか？

## ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

赤い椿

白い椿と

落ちにけり

河東碧梧桐

hóng chá huā

紅茶花

bái chá huā

白茶花

huā luò xià

花落下

hái jiàn huā

还见花

## 去参观“柳子谷・柳咏絮一族展”

吉光 清

満画伯には「わんりい誌」で「四字成語」の軽妙なタッチの挿絵と「漢訳俳句」の作者、そして「わんりい」が各種催しに参加する際の「水墨画教室」講師として、並々ならぬご協力を頂いています。わんりい会員となって日も浅い筆者は、「水墨画の先生」との認識しか持ち合わせず、満画伯のご一族について存じ上げる機会もありませんでした。

筆者の水墨画の知識は、博物館の展示で見られる「深山幽谷を描いた山水画や、歴史的故事や人物を描いた墨絵」という程度で、展示品の多くは、中国から伝来した明、宋の時代の作品や日本では禅僧たちの手によるものでした。

ウィキペディアでは、「中国では唐代に墨の線だけでなく、ぼかしで濃淡・明暗を表現して山水を描く水墨画が成立し、宋代には禅宗的故事や人物画の他に、文人官僚の余技として、四君子（蘭、竹、菊、梅）を描く水墨画が盛んになった。明代には花卉、果物、野菜、魚なども描かれた」とあります。

「わんりい」3月号（2月末に発行）の「みんなの広場」にお知らせが載った「谷風墨韻・柳氏画派傳人展」（於：中国文化センター、2024年3月18日～3月22日）に、開会2日目の3月19日（火）に行かせていただきました。

初日の開幕式には、日中水墨協会会長の満画伯が開会挨拶を行い、展覧会に出品された作品と芸術家を紹介し、展覧会に出席出来なかった「柳咏絮」は映

像で挨拶を行い、続いて、日中水墨協会副会長の叶霖氏、日本華人美術家協会副会長の武楽群氏、日本中国友好協会常務理事の永田哲二氏、日中協会理事長の瀬野清水氏、神奈川県日本中国友好協会副会長の上島保則氏の他に、美術

評論家の藤田一人氏、画家の王子江氏など、多数の来賓からの挨拶があり、出席者は百名を超えたということでした。

展覧会の会場に入ると、大きな部屋の、見える限りの壁面に、縦長の用紙に描かれた墨絵が貼り出されている様は壮観でした。作品群は「柳子谷」、「柳咏絮」、「満画」各氏によるものでした。もとより、美術的な鑑賞力は持ち合わせていないので、形式的な事柄に気持ちが動いてしまいました。

「墨で描かれた山水画」との先入観を持っていましたが、墨だけでなく、赤、青、白などの色彩も使用されていました。「柳子谷」も初期は山水画の典型のようですが、時代が下がるにつれ、「自然」「植物」「動物」と画題が広がっていることが見られ、それに伴って、多くの色が使用された絵も現れ、「柳咏絮」には「墨絵」とは思えない華やかな絵もありました。

当然ながら、展覧会の名称と作品展示から、3人の系譜が理解されました。絵を通じて感じたのは、ともに「蘭」と「竹」が描かれていることでした。

大戦や朝鮮戦争、文化大革命の荒波の中で、「柳子谷」は、時には戦争画を世に出さなければならなかった（日本を去った藤田嗣治のように）が、それらを乗り越えて、画家として歴史に残る偉大な業績を残し、その祖父から、母の「柳咏絮」を通じて満画伯に継承された全てを象徴しているように思われました。

帰り際に、「わんりい」に画集1冊を寄贈いただきました（左の写真）。2024年3月15日の第1刷発行で、発行者は満画伯、発行所は懐玉出版社です。

最初のページをめくると、「柳子谷が椅子に座って雑誌を読んでいる」カラー写真、次ページに「柳咏絮が傍らで育つ竹に両手で触れている」カラー写真が現れ、目次に続いて、「柳子谷」父娘の画壇での活躍を評価・称賛する「まえがき」、その後、「柳子谷」の61作品、「柳咏絮」の74作品がきれいなカラー写真で掲載され、ズシリと重い書籍です。巻末には、「柳子谷没後の年代記」と「柳咏絮略歴」、最後に、満画伯の「祖父と過ごした日々を思う」という回想文が掲載されています。画伯の、祖父に対する深い敬慕の念と、慈母への尊敬と感謝の気持ちが込められていると感じました。

（画集は「わんりい」事務局が保管しております。機会があれば、どうぞご覧になって下さい。）



“わんりい”に寄贈された画集

## 【わんりいの催し】

### ♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：5月14日（火）10：00～11：30  
6月18日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

*** 中国語で読む 漢詩の会 ***

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで
読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：5月26日（日）10：00～11：30
6月30日（日）10：00～11：30
- 講師：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp
(有為楠)



■5月・6月定例会 代表者宅

- ▼5月9日（木）13：45～
- ▼6月13日（木）13：45～

■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼6月号 5月30日（木）
- ▼7月号 未定

☆☆編集後記☆☆

5月がこれから始まるというのに、日本各地で気温が25度以上の「夏日」になることが多くなりました。そして、多くの人々が「春が無くなってしまった」と口にします。

確かに、寒さが収まり、春が来たかと思ったら夏の暑さが続き、春特有の「三寒四温」が「三寒四暑」となってしまう、春らしいうらかな日はほとんどありませんでした。

こんな状態を体験して、20数年前の北京での経験を思い出しました。厳しい冬を過ごして、4月の終わりのある日、空が昨日より明るく感じられました。その日から北京では快晴が続き真夏の日差しが射すようになりました。当時から、北京には春が無かったのです。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし  
郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年度会費1000円  
■問合せ：044-986-4195（寺西）

## ‘わんりい’293号の主な目次

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 寺子屋 四字成語(72)「名落孫山」……………   | 2  |
| 日译诗词(40) 杜牧「江南の春」……………    | 3  |
| 「漢詩の会報告」 李清照の三詞……………      | 4  |
| 「中原雑感」(41) 4年ぶりの河南省(つづき)… | 7  |
| 「避暑山荘・外八廟」 駆け足旅行(12) ……   | 9  |
| 新郎に贈るあでやかな手縫いの衣装……………     | 11 |
| 女子教育のパイオニア・津田梅子(1)…………    | 13 |
| 台湾で山登り、そして地震……………         | 15 |
| プリンセスの住まい 久邇宮邸・李王家……      | 17 |
| 中国の笑い話(58)……………           | 19 |
| みんなの広場……………               | 20 |
| ‘わんりい’の催し・お知らせ……………       | 22 |